

IV-1

土木学原論事始め（その1）

心が形を造る——土木技術家の義務と修練

井上達明建築事務所 正会員 井上 達明

西欧の文化・科学・技術・医学、はキリスト教、デカルト、カントからくる考え方で理性で分析的に物を捉え、自然を征服する物であった。東洋の思想は、禅に代表されるように、体と心で物を捉える、即ち「心身一如」である。座禅により呼吸を正し、心を正し清める。1976年の「土木工学大系」の編集委員会は刊行の言葉の冒頭で「土木工学は岐路に立っている云々」¹⁾と述べているが、その全35巻を繙いてみても、依然として西欧型分析的手法で組み立てられている。筆者は本稿で土木工学全般に通じる哲学、心構えそして土木工学者と土木技術者の心得るべき事、修練すべき事について述べたい。尚、医学においても「医学原論」なる物があり二千数百年前のヒポクラテスの名が何度も現れるが、医学概論的な物、或いは医学者の独り善がりの医学原論が多い。建築では「建築計画原論」なる物があるが、原論とは似て非なる物で、光・水・空気等に関する学問である。建築原論は「建築論」或いは「意匠」の名で論じられている。

A. 心とは人間らしさである——そして美用多元論

1° 心とは何か 心とは何かについては、古来文学から現代医学、生理学に到る迄色々な意見がある。心臓は読んで字の如く「心の臓」である。恋のときめきは心臓に現れる。英語でもハート Heart(心臓)に心があるとしており、トランプのハート型♥となる。しかし心臓が物を考えるわけでもなし、好きな女性を見分けるわけでもないことは明らかであり、近年脳の研究が進み、解剖学的にも生理学からもその働きについても明らかになり、フランスのジャン・ドラクール(Jean Delacour)は「Le Cerveau et l'Esprit」²⁾で「脳は心である」とし、ヘーゲル等の脳と精神の一元論、又「我思う故に我在り」のデカルトの二元論に対し、ドラクールは「脳と心は同値・同一」と見なし、心は機能である、脳は機能である、機能の主体は問題にならないとし、心も脳も表現を作り出し、これを生存や繁殖の手段として使用する能力として定義され、そして、表現の意味作用は、種の自然史で培われ続けた機能的価値そのものにあると考える。日本の小田晋は、人間は「頭でなく肚である」と述べ、東洋で古くからある「心と肚」について言及しているが、これは精神の持ち方と内臓の在り方との深い関係から来るものと考えられる。

2° 「心とは人間らしさである」 筆者は以上のような議論を踏まえ乍ら、心とは人間らしさであるという観点から、心がどういう働きをするか心をどう持つべきか、そして心と景観の関係について考えてみたい。

3° 地球の自然、動物、植物の何という美しさ 用美一元論 地球の自然及び動植物は総て、その働きからもその造形からも総て我々の先生である。チャールス・ダーウィンは「種の起源」で進化論、適者生存を唱えた。そして驚くべき機能・器官と造形を兼ね備えた生き物達が地球上に満ち溢れた。考古学者は化石を研究して、カンブリア紀の「アノマロカリス」等の想像図を描いているが、恐竜さえも美しさがあるのにそのグロテスクさから筆者はアノマロカリス等の形態はもっと違った物ではなかったかと疑っている。近代建築の機能主義について 年の画家出身の建築家ル=コルビュジエの「住宅は住む為の機械である」は当時一世を風靡し、以後数十年世界の建築家は人類の莫大な資産を消費して「住む為の機械」を造ってきた。機能的でさえあれば美しいという、いわば「用(機能)美一元論」である。柳宗悦は、大無量寿經の四十八願中の第四願「無有^{こうじゅう}好醜の願」(好=美)から、美醜の二元に拘束されず悉くが済度される所をこそ浄土と呼び得るとし、美醜不二即ち「不二美」を唱えた。精神病理学専攻の木村敏は講演「心身相関と間主観性」で「主観／主体」という言葉を手がかりに、西洋哲学の宿痾とも言うべき心身二元論を「主体的身体」という方向へ乗り越えようと試み、「心身相関」を提唱した。³⁾ 維摩経⁴⁾では「不二法門に入る」と教え、善と不善、美と醜のように互いに相反する二つのものが、実は決して二つの区別されたものではないとする。

心、華嚴唯心偈、人間らしさ、自然・動物・植物の美、美用多元論

井上達明建築事務所、〒555-0011 大阪市西淀川区竹島3丁目7番4号、TEL 06-478-1028, FAX 06-478-1026

4° **カントの用美二元論、筆者の「美用多元論」** カントは、用美一元論とは異なり、美は用とは別の次元で考え造り出さなければならない物とした。筆者が考えるに美は心が造り心で感じる。色々な美があるけれどもその心は一つである。しかし用即ち機能は、その物に要求される働き、働きを満足させる構造、環境との調和（環境評価）、それを支える経済、或いはそれを造らない方が子々孫々の為には良いのではないかな等、今日では数々の「用」を検討、熟慮しなければ土木構造物は造れない。筆者はこれを「美用多元論」と称することにする。

5° **心が景観を創る——心は一切世界の中に法（もの）として造らざる無し（華嚴唯心偈）⁵⁾**

華嚴經では、心がこの世の形あるものの総てを造る、心と佛と人々が一体となって自由自在に物を造るのだと言っている。

心如工画師	心は画師の工なる如く	若人欲求知	若し人求め知らんと欲せば
画種種五陰	種種の五陰を画き	三世一切佛	三世一切の佛
一切世界中	一切世界の中に	応当如是觀	応に是の如く觀ずべし
無法而不造	法にして造らざる無し（中略）	心造諸如来	心が諸の如来を造ると

唯心偈は「心と佛と衆生は一つ」と言っているのであるが、人間の心というのは大したものであり、一瞬の内に神・佛になり、又ふとしたはずみに悪魔にもなる。⁵⁾ 又デカルトの「我思う故に我あり」と言う人間中心の考え方から人間の技術が先行し、地球という存在が後から来るようでは、温暖化を始めとして地球がこうなるのは当たり前（堀田善衛）と言われているが、筆者は心が形を造ると考え、人間らしさの根元である心を正しく持つことによって良い土木造形物が出来、宇宙船地球号が子々孫々にまで受け継がれるものと考ええる。心が景観を造り、景観は人の心身を守り癒す胎内である。景観は人の心の表れであり、景観は人の心身を守り癒す。

B. 形ある物は総て技術造形（計画、景観）家の責任である——技術造形家の修練その1（その方法）

1° **人間としての価値観（自然、地球環境、宇宙、国家社会、人間についての）を確立すること**

このことは土木に限らずどの分野についても言えることであるが、土木技術者は政治や行政の命ずるままの土木工作物を造る単なる職人であってはならない。人間として地球環境をどう考えるか、又国家社会についてどう考えるか、そして何よりも人間である自分が「人間」についてどう考えるか。古今東西の先賢から学び、且つ自ら深く思索して自己を確立することが大切である。原爆を創った物理学者の過ちの轍を踏んではならない。

2° **与えられた土木工学の過信から抜け出すこと** 土木工学とは、現在大学で教えられているような、或いは学者の書いた参考書にある物と思われているが、このような土木工学はほんのヒントに過ぎないのだ。仕事の対象の根本から自分の心で考え直せば、君の為すべきことが明らかになる。

3° **形ある物は総て君（土木技術者——以下同じ）の領分（守備範囲）であり、君の責任である**

地球、宇宙に存在する総ての造形が君の手本であり教師である。自然、動物、植物、人間、絵画、彫刻、人工物等の総てを責任範囲と考え自らよく対象を観察し、それについて思索すること。

4° **あらゆる分野（土木、建築、美術、絵画、彫刻、音楽、文学、経済）について修練することは君の責任である**

造園、特に日本の造園については、西洋の幾何学的造形の庭園と異なり、自然から学び、自由で自然に溶け込みしかもそれ自身美しい調和を作り出すその哲学的手法は、土木造形家として深く学ぶ価値がある。

5° **スケッチ力を養え——CADで造形の修練が出来るか？** 造形の能力は大学を卒業したり本を読んだり或いは物を見たりだけでは身に付かない。良い物を見ると同時に常に頭と手を働かせて、自ら造形を描き試行錯誤を重ねることにより、造形の能力を磨くことが出来るのだ。

【参考文献】

- 1) 「土木工学大系」 彰国社、1976年
- 2) ジャン・ドラクール著、須賀哲夫・中村祐子・中島欣哉共訳「脳はこころである」(株)白水社、1997年
- 3) 木村敏「からだ・こころ・生命」 河合文化教育研究所、1997年
- 4) 「NHKこころをよむ 華嚴經 維摩經」 日本放送出版協会、昭和62年、P221
- 5) 「NHKこころをよむ 華嚴經 維摩經」 日本放送出版協会、昭和62年、P98